

昭和四十年四月二十七日 〓講演

## 「私と日本の歴史」

上智大学前学長・現教授 ヘルマン・ホイヴェルス先生

私はただいま紹介されたヘルマン・ホイヴェルスでございます。これまで四十二、三年の間に、たびたび学生の前で、いろんな講演もいたしました。今晩のような広い講堂いっぱいのはめつたにありません。(拍手)

それで、今晩は諸君とともに歴史、とくに私の見た日本の歴史について、少しゆっくりと自分の感じたことを述べたいと思います。確かに私の日本に滞在したこの四十二、三年間というのは、日本にとつてもドイツにとつても、また世界にとつても、非常に重大な歴史の転換時代であったと思います。それで、ある意味において私たちは非常に恵まれた時間に住んでおるといえます。どういうわけで……、それは終わりに申しませう。

まず歴史について、私は少し形而上学的に申し上げたい。  
なんのために人は歴史に興味をもって研究するか。——三つの答があります。ひとつは、過去を知るため。すべての人間に関する材料は

面白いので、それを知りたい。二つには、現在を理解するために過去を研究する。過去を知らないとしても現在を十分に理解することはできない。たとえば私のように外から日本に入ったものは現在の日本ばかり見て、とくに東京の現在だけを見ていますと、まだ本当の日本について大したことは知り得ないのです。三番目の答は、将来を知りたい。過去、現在の様子を見て将来がどうなるかを知りたい。この三番目がいちばん弱いのです。どんなに歴史を研究しましても、来年について大したことはまだわかりません。第三次大戦になるかどうか、だれも知らない。あるいは地球は爆発して消えてしまいか、あるいは原子爆弾によって人間が人間を滅ぼすか、誰もわからない。

いま私は三つの説を述べましたが、これは別々でなくこの三つの方向をいっしょにして、私たちは興味をもって歴史を研究する。そしてまた歴史の本質について、即ちどうして人類の歴史はあるのかの問題に入りたい。

そこで私たちは、人間の文化の光のもとに、どういう風にして世の中のあらゆる政治的、経済的、また思想上、宗教上のことを築いてきたか、ということを観て研究したい。その中の本質は何であるか。ある人は、人類の歴史は、いわゆる経済物質上の盲目的な発展にすぎない、といいますけれども、それではどうも歴史にはなりません。私たちは、人類の歴史の本質は人間の自由意思だ、たとえば「シーザーが、ルビコンという小さな河を越えるか越えないか」という、その自由意思、唯一のシーザーだけの頭の中のスイッチみたいなのが、どんなに後の歴史のすべてを新しい方に向けたか、ということを明らかに考えるのであります。歴史家は、偉大な人物が、どういう動機でこういう道を選んだかを探ろうとしますが、勿論そのみならずべてではない。そこには無意識的なことも少なからずあります。たとえば経済とか、あるいは民衆の中の動きとか……。しかし一番の重点は自由意思であります。パーソナリティの中の決

定、これが歴史の本質であります。更に進んで、歴史は一体何のためか、人類はどういう目標に向かつてその道をたどるのか。この点は歴史家が人間の愚かさを体得して、神の知恵とか、神の言葉とかの助けを頂かない限り、なかなかはつきりしたことはいえませんが、申し上げられる範囲において少し述べましょう。

歴史の目的は、二つの大きい考えに分けることができる。この説によって、ある歴史家は、人類の歴史の目標は、この世の中に入り込んでしまつて、いわゆる永遠とか天国とか、そういう宗教的なことは全く無縁の空想にすぎない。であるから人類歴史の目標はこの世の中、コスモスの中に行なわれる。

そこにも種々な説がありますが、簡単に二つの大きな説に分けますと、ひとつは、歴史は「発展する人間」である。もうひとつは、歴史は「発展する神である」ということです。「発展する人間だ」という説を述べる歴史家がいちばん多いのです。そうして発展する人間はあらゆる方面で進んで、たとえば進歩、あるいは人間の人格、道徳、あるいは経済、あるいは工業等なんでもすべての方面で発展する、それが歴史の目標であるという説。次にこれと反対の説はとくにヘーゲルの述べた「発展する神」という考えである。人類の歴史は、どうも人間は大したことは知らないけれども、神そのものは、無意識

の状態から人間に於ける意識的な状態に変わつて発展する、それが「神である人間の発展」だとの考えです。すべてのコスモスの中に入り込む説は、どうも人間一個人に対して何のものにもなりません。

いちばん厳しい歴史上のものは死の裁きであります。「死」、恐しい言葉です。ドイツではトート (Tot) と申します。死というものがあるから、歴史もあり、若いゼネレーションもあり、年取ったゼネレーションもあるのです。いずれ地上のすべての歴史は消えてしまふはずで、それは当然なことではないでしょうか。人間の存在は永遠のものではありません。どういう風にして滅びるか、まだきまつていないのですけれども、滅びる可能性は沢山あります。あるいは天文学の研究からもう一つ風にして地球は滅びるか聞いて見たい問題です。しかしいまは、毎日の新聞紙上でも見られる通り、人間は自分自身でもって地球を滅ぼすことはでき得るのです。ある雑誌の漫画に、原子爆撃のために人類が全滅したとき、アフリカかどつかの樹の上に一夫一婦のサルさんが残っていて、このサルさんが木の枝から人類の滅亡を見て、「ああ、もう一ぺんこの長い道を初めからたどらなきゃならないのか——」(拍手) これは冗談ですけども。でも実際は、人類は決して永遠のものでない。地球ばかりでなく太陽もまたど

ういうふうにして発展するか、あるいはしばむか、天文学者たちが一生懸命研究しております。そこから、大変な大きい疑問が起こってくるのです。もし人類が地球から消えてしまふならば、いままで築いてきた文化、たとえばギリシャの彫刻とかあるいは数多の詩人たちの立派な作品、あるいはすべての人たちの美德、こうしたあらゆる価値は、どうしてそのまま滅んでしまふのか、という疑問に逢着します。とにかくこの人類の目標については、何等かの信仰、確信をもっていないと答えることはできません。

二、三年前、有名なイギリスのトインビー博士が日本に来て、歴史家との討論会で、この問題について討論しました。人類の意味、人類の目標、歴史は何のための歴史か、そしていろんな文化的な希望も述べたけれども、ひとつも結論に到達したものはありません。それは残念ながら彼は、キリスト教的な信仰というような根本的なものを何も持っていないから、いわゆる自由思想人間だけのヒューマニズムで、どうも答は出てこないのです。この問題に対して西洋と日本の学者たちは違う気持ちで答える。西洋の学者たちは、ずいぶんあせりの気持ち、また怒り、反感なども、そこにはあるのですが、日本の歴史家はたいへん平静な気持ちで、いわゆる事実をそのまま受け取つて、別にそう不愉快な気持ちになりません。

当然のことではないでしょうか。昔ギリシャ人の言ったように、いずれできたものだったら消え去ることは当然だ、と。これはコスモスの中の人間ばかり認める人の立場でしょうか。あきらめでしょうか。でも人類歴史の中を見ると、およそ二千年前に、パレスティン(パレスチナ)という場所で、神の知らせとか、神の御言葉が響いたという報告があるのです。いま私は、決してそれが本当だとは申しません。ただ歴史の中にひとつの希望の報告があった。それは聖書の中に載っている。しかしまだ、聖書を信用しなさいとはいいません。ただ聖書そのものがあるということだけ申します。普通の学問上の知識として受け取ってよい。

ちょうど去年か、一昨年でしたか、ローマのパウロ六世は、パレスティンのほうに巡礼なされて、そこで人類に向かって、ラジオで放送しました。そのとき面白いことをひとつおっしゃっています。この歴史上の小さい場所から、三つの大きい宗教がその起源を受けました。ひとつはユダヤ人です。なるほど、人類に対してユダヤ人は、ずいぶん面倒な問題を投げかけた国民であります。もうひとつはマホメト、とつても元気のいい、確信に充ちた独善的なマホメトです。いくたびか私たちの祖先をおびやかして、私たちを滅ぼそうとしたんです。けれども幸いに平和主義でなかった祖先はこれに反抗しま

した。……幸いでしたでしような(拍手)。それからもうひとつは、いわゆるキリスト教です。

この三つの宗教は、そこからどういう仕合せを受けたか。それは人類の歴史を創った造り主、また支配したまうもの、いわゆる天地万物の造り主の神の信仰はこれ等を通して人類に広がり込みました。それは歴史の中に、聖書の中に、この三つの大きい宗教は載っている。そうしてこういう聖書の知らせによって、人間の使命はこの世の中のコスモスだけに制約されていない。人間の心は永遠に対する希望をもつことを許されている。そして一個の人間には絶対的な価値があるという、これがいちばん救いになる聖書の中の言葉であります。それが一個の人間の価値、社会というものは一個人に対する務め、人に対する使命をもっていて、人間は社会の奴隷ではない。むしろ人間は社会を支配するもの、旧約聖書をはじめ新約聖書の中に一個人としての人の価値は明らかに載っている。

こうして歴史全体を見ますと、私たちは、なるほど、そこに何か大きい希望がわいてきますまいか。すなわち人間の歴史においての永遠の生命に対する準備、こうして人間はこの世の中に對する使命をもっている。同時にこれを通じて、自分の永遠の使命を設ける。

この少しむずかしい、空想的(?)な話を、はつきりと理解するために、フォイエルバッハ

の話をしていしましょう。フォイエルバッハは皆さんご存じのように、一九世紀の唯物論の父親です。カール・マルクスとともにヘーゲルの弟子で、ヘーゲルの、「精神は弱いもの、物質は強いもの」という思想を受け、フォイエルバッハの一生涯は物質のために捧げられました。そのフォイエルバッハがちょうど今晚のこの講演会のように、ハイデルベルク大学の学生たちのために講演会を開きました。そのときの彼の結論は、次のようなとてもおもしろいものでした。

「諸君は、いま私の講演を聞いてよくわかったでしょう」と言っただんです。すなわち「祈る人より働く人になれ」。それから「あの世の志願者より、この世の中の人間になれ」。三番目に、「半分動物、半分天使である状態から人間になれ」と言いました。もういっぺん申しましょう。

第一には、祈る人から働く人になれ。ちょうど後にニーチェも言ったように、「地球に対して忠実であれ」。しかしハイデルベルク大学の学生たちは、そう熱心に祈りをした人たちでないと思います。ですからこのフォイエルバッハのすすめも、ずいぶんおかしかったかもしれない。働く人になれといっても、学生たちはむしろ遊びたいんですね(笑声)。とくにハイデルベルク大学の学生たちは、決闘もすればビールも飲む、勉強は、いずれ試験があるから仕方な

く……。ですから、二年のときはあんまり勉強しないで、国家試験の前に一生懸命勉強したんですよ。でもフォイエルバッハは、まじめにそれを言ったんです。それから二番目の、「あの世の志願者より……」どうもハイデルベルク（大学）の大学生たちは、そんなに急いで、喜んであの世の天国に行きたくないと思えます（笑声）。「この世の中の市民になれ——ビュルゲル・ディーザー・ヴェルト Bürger dieser Welt」、人々はもう少しこの世を、自分の本国、自分の故郷だと思おうように」と言ったんです。また三番目は、確かに社会の中をよく知っている人たちは、人間は半分動物、半分天使であるということ、よくいわれます。ゲーテも『ファウスト』の中でファウストが、自分は一方では非常に下のほうにひっぱられている、本能的に悪いことばかりしたい。他方ではまた、ヒバリの歌を聞くと、心は全く上のほうに理想に向かって飛び上がりたい……。フォイエルバッハは、この半分動物で半分天使である状態をやめなさい、純粹な人間になれと叫んだのです。

このことは歴史のいちばん深い問題に触れています。私たちは、いつも、これでもなく、あれでもなく、両方を認めなければならぬ。それで初めて健全な人生観になる。初めて世界宇宙の歴史において、何か道理が入ってきて、道理によって支配される。人は祈りなさい、そして働きなさい、両方必要です。働くだけで人間の使命を十分に果たすことはできません。死んでからどうなるか——ハムレットも嘆いて言っている。「トウ・ビー・オア・ナット・トウ・ビー・ザット・イズ・ザ・クエスション」。to be or not to be, that is the question」は、きりとナット・トウ・ビー not to be だったら、非常に簡単な人生になります。私自身の気持ちでもそうです。もしあの世は、確かにないものならば、無意味な動物的な世界です。それならこの世の中において非常に自由な気持ちになります。心とか良心の拘束とかいうものが何もない、本能とか欲望のままになんでも……。ただ警察と衝突しないように（笑声）。それで十分でないでしょうか。ですから、トウ・ビー・オア・ナット・トウ・ビー、確かにそれは疑問だ。そのためにまた働くことも必要です。これも、たびたび私たちキリスト教に対していわれる不平は、世の中はそんな甘いものではない。余り裏面目すぎる。でもそれは間違っています。もしこの世の中を十分真面目にとらなかつたら、私たちは人間の使命に反します。この世の中の働きによって永遠の生命は決まるのです。

私たちが昔、学校でフランス語を勉強したとき、十一、三歳のころでしたか、こういう会話がありました。ポールという息子が母親に「ほんとうですか、天国においては働く必要はないんですか、お母さん」母は答えて、「それはほんとうです。天国では働かなくてもいいんですけども、地上で働かなかつた人は、天国には入れません」「Est-ce qu'il vrai qu'on en paradis on ne doit travailler?» disait Paul à sa mère. “C'est vrai, mais nul est admis qui n'a travaillé sur terre.”と言った。そのとおりです。この世と人間の永遠の使命とは、厳密な結びつき、密接な関係にあります。それは聖書、神あるいは心の希望の中でもわかることです。

半分動物、半分天使というのは、人類の中のいちばん悲劇的な状態であります。ベルリン大学のシュプランガー博士は、いわゆるセックスの問題について、現在アメリカ初め全世界において、雑誌などはこればかり扱っています。それをこう言っております。「人間は、若いときにセックスに対する意識がだんだんついてくると、生涯そのために打ち打たれるような状態になる」と。とくに近代——現在の文化の中に在っては人間は自分の心を支配することができない。これは確かに動物です。ただ幸いに半分だけ動物なのです。全部動物だったら、どうにも希望がない。同時にまた人間は半分天使です。人間は理想主義者です。人間はいい気持で、どんなに理想的に考えるか。よいことをした時の人間は、全く普通の人間概念を越しています。重要なことはそこにバランス、つり合

いをとることで。それこそ結局歴史の中の人間の難かしい仕事であります。

歴史の大体のことはそれくらいにして、今度は、日本の歴史について、私はどういふふうに見ているかをお話ししましょう。

まず、私は決して予言者ではない。将来について、少しはわかるけれども、大したことはわからない。私が日本に参りましたのは、ちょうど震災の一週間ばかり前で、その間東京に暮して、古い日本を少し知りました。震災とともに日本の歴史も震えて、新しいほうに運ばれたと私は思います。その後もいろんな愉快なこと、不愉快なこともある。先ずいちばん不愉快なこととは不景気のときでした。不景気という言葉はいまでも私の耳に、たいへんいやな響きをもっています。そのときの学生たちの就職の問題、どんなに苦しかったか。不景気、それから満洲事変、支那事変、第二次大戦、敗戦、すべてのこういう大きい動きにおいて、他国の人たちは、非常にペシミスティックに日本の歴史を見ました。それはまず震災のときに、日本は五十年ぐらい遅れるだろうとか、それからいろんな事件が起こって不幸ばかり予言しました。いちばんの不幸は、もちろん第二次大戦の戦後のときです。そのときに、なんと日本の将来は暗いことばかりではないか、希望なしという人も相当ありました。私は決してそうは感じなかった。

却つて、日本にはまだ将来に向かつてたいへん大きいひとつの使命があると思つたのです。これは決してあとから予言したということではないんです。

一九四〇年、紀元二千六百年の記念のとき、私は上智大学の学長として教壇にのぼり、自分で、日本についての十ぐらいの和歌をドイツ語でこしらえました。それをこの間発表した本の中に、やはりドイツ語で載せました。その中に日本の使命について次のように申しました。「遠く世界のはてに二千六百年よ、静かにおのれに満足してお前は深く根をおろした。さあ今度は花を咲かせ実をみのらせるのだ」。それが私の日本歴史に関する結論であります。それは日本が世界の端にひつ込んで、そこで自力で、ほとんど世界の助けなしに、現在私たちが感心するような文化、文芸を発達させた。こういう国民が将来、ドイツ語で申しますと「オーネ・ザンク・ウント・クランク ohne Sang und Klang」おとなしく沈んでしまふだろうと思わないのです。この国民はまた何か大きい使命をもっている。それはどうでしょう。現在新しい時代においては暴力の戦争というものは将来に対する手段ではないということを、既に賢い人たちはみんな承諾しているのです。それは人類の存在に関わる危険ですから、現在社会の中では、戦争という問題は全く新しく議論さ

れる状態になりました。

次に現在は科学も哲学も神学も、前よりも静かに、また正直になりました。一九世紀においては、非常にみにくい科学者と哲学者と神学者たちの、いろんな争いがありましたけれども、自分の知識の限界もわかつてきて、近ごろはもう科学も謙遜になりました。それから神学者たちも、いまはもう科学に手を焼きたくないんです。そして賢くなつて、自分の知識に限界があるということもわかつています。いちばん困っているのは哲学者です。哲学者たちは自分の知識だけで人間という問題を解決したい、あるいは研究したいのです。けれども人間は、人間だけでは人間について何の結論も得られない。道徳の問題にしても、道徳は永遠の御心というのがなかったら、どうして存在するでしょう。むしろ人間ばかりだったら動物のレベルに落ちてしまいます。これはまず広い意味において感じたことです。

日本はいま科学のほうでも、とても才能を見せています。この間私の友人で、ミュンヘン大学のニューマンという博士が奥さんといたしよに上智大学の私のところへ突然訪ねてきました。その人はミュンヘン大学でとくに機械のエレメンツなど教えているのですが、日本にも立ち寄られて、日本の技師らと座談会や、いろいろ研究会などやつて、私にこう言われました。

「日本はいままで機械とか科学のほうは、たいてい西洋からもらったのだが、もうその必要はなくなつた。今度は私たち西洋のほうで日本からもらう時代になる」と、それは確かに真実であります。非常に日本の工業、科学は進歩して、世界のヒーローになつてしまいました。

将来に対する人類のひとつの希望は確かに科学です。アフリカ、南米、あるいはインドのほうでなぜあんなに飢える人があるのか。それは怠け者でもっと科学を使わないからです。それで現在、ヨーロッパから、また日本からもこれらの地方へ行つて、科学の力で救出してきます。科学は神の使命です。この科学に対する頭、能力を神は人間に下さつたのですから、人間は科学によつてこの地上を救わなければならぬ。そして世界戦争を防止せねばならない。それは人類全体が協力して戦争を防ぐのは当然のことですし、またみんなそう思つていよう。

もう少し詳しく申し上げますと、ひとつの不思議な問題、それは日本の文学でも思想界でも、天地万物の造り主の神、すなわち永遠のパーソナリティ、人間のパーソナリティという問題は、哲学上あるいは信仰上においても、すべてを含む問題であります。

私たちは人間のパーソナリティをもつていて、この小さな頭の中に。この中には、小さい

けれども世の中全部のことが入つていて。奇蹟的な事実です。私はこんな長いサオ(からだ)の上に頭をのつけて、よく東京の街を歩きますが、この小さな頭の中に過去も現在も、知識の力も愛の力も、なんでもあります。こうした人間のパーソナリティは無限な永遠のパーソナリティに対するひとつのしるしです。諸君もみんなとつてもりつばな頭をもつているので、どうして、みんな同じように論理学のことでも覚えて、同じ真理をつかまえることができ、同じ心の感情の持主となることが出来るのか、それは永遠の、真実の奇蹟であります。それはどんな科学者でもまだ解けません。

それで私は日本において、もう三十五年前から、キリシタン時代の或る一人の女の英雄を研究して、これを主題として文学的作品を発表しました。それは細川ガラシャであります。この方はちやうど東洋と西洋ですか……。西洋でもない、キリスト教です。信仰上の調和を模範的になさつた人です。明智光秀の娘として、不幸のどん底に落ちてしまつた。明智光秀というのは、それほど悪い人でもなかつたんですが、娘に仏教——禅を教えました。しかし不幸に陥つたときに、なかなか禅の甘い調和ではどうも満足はできない。むしろ世界宇宙はひとつの恐しい怪物ではないでしょうか。ガラシャは三戸野の隠れ家で二年間ぐらいい悩んでいました

が、秀吉のおかげで殺されずに助かりました。そして大坂の新しい屋敷の中で、偶然、夫、忠興の友人高山右近からクリスチャンの物語を聞きました。忠興は、自分では別に信仰していませんでしたが、妻が非常に美人で、なかなか外へ行くのは好ましくないので、慰めるつもりで土産話をしました。その中で、西洋のほうでは創造主の神を信じていることを話したので、それを聞いて夫人はびっくりしました。それはちやうど三戸野にいたとき悩んでいた疑問に対する答えであつたのです。もしこの世界中を支配する力と愛をもつた本当のものがいらつしやるならば、彼女はそれをもつと知りたうと思つた。忠興が薩摩征伐に行つて、ちやうど四月八日の釈迦牟尼の誕生日に、貴婦人たちはみんな寺参りに、お寺のほうへ行きましたが、彼女は友だちといつしよにひそかにクリスチャンの教会に行き、そこでもつと話を聞いて信者になりました。この信仰のおかげで、後に非常にひどい運命に対しても、単にあきらめただけもなく、ほんとうに捧げの、信頼の心でこれを受けることができました。このことを私は非常に興味をもつて研究して、三戸野の場所までも友だちといつしよに見ることができました。京都の北のほう、峰山から山のほうに行き、沼、村もあり、そのずつと山の上にバラックを建てて暮らしていた。そこは昔、平家ののがれ

たところでしたが、そこには夫人の思い出までもあったのです。

それは現在の私たちのことに対する、ひとつのしるしではないでしょうか。すなわち哲学上も信仰上もいわゆる生きているパーソナリティ、絶対的な価値ある人間の自我、また神のパーソナリティのつながりがあった、こうしてはじめて歴史の中のいちばんの目標が生れそのために歴史があるのです。

この世界の中の経済あるいは政治、それは確かに重大な問題ですけれども、最大の重大事ではない。いちばん重大な問題は、人はいかにして良心に従って正しい道を歩み、永遠の生命を確かめるかにある。丁度キリストの言葉のように——「人全世界をもうくと、もしその生命を損せば何の益かあらん」(マルコ八・三四)。また、人間は知識だけでは本当の人ではない、デモンのほうにも知識はりっぱにあるのです。けれども心がない。心がすべてです。

私は東京で、たぶんいちばんたくさん結婚式を行なう人じゃないでしょうか(拍手)。前は学校に勤めていましたが、いまは大体教会のほうの仕事をしています。そして結婚式の前にお話をしますが、それはかわるがわる違った話をします、いつも同じでは退屈しますから(拍手)。その中のひとつの話はカール・ヤスパースという哲学者の話です。彼は若い哲学者、医者とし

て、まだなんにも信じないまま結婚しました。そのときヤスパースは、どうして自分は人類全体の女性の中から、ほかの女性はみんな無視して、この一人だけをピックアップするのか。もうひとつは、どうして、この人に対して自分は絶対的な忠実を誓うのか……、あぶない仕事ではないでしょうか(拍手)。でも心の中で、結婚式の朝には、必ず絶対的な忠実を誓いましょう、と思っただけです。そしてまたカール・ヤスパースはそれを忠実に守った。それは二つの哲学的な大きな疑問です。自分でなにも信仰のない若いドイツ人ですから、何も答は知らないけれども、もらった娘さんはユダヤ人の娘です。そしてその娘は旧約聖書を家庭の中に持つてきました。カール・ヤスパースは、それまで聖書は非常に軽べつしていましたが、いっぺんもあけてみたことがなかったのですが、でも妻への愛のためにちよいとあけて見、またあけて見ているうちにびっくりした。どうしてでしょう。自分の哲学者としての疑問に対する答が、旧約聖書には、きれいに載っているんです。第一ページの人間の使命についても、人は父母を離れて妻に接すべきもの、それから男の使命は、大自然を征服すること、また女の使命、それは助けの意味と、また命の泉であること、それで神の存在を発見しました。この話を結婚式のときにするのです。

もうひとつあります。それは、もし家庭において夫婦の愛、また親子の愛がないならば、人類全体に価値はない。確かに、もし家庭上の愛がくずれなければ、一切の人類のよいものが全部むなしく、無意味になってしまいます。ですから愛というものは一切を生かすものであります。これが人類歴史においていちばん美しい、深い、理想的なものであります。

ですから人間の一人の問題は、いかにして正しく人を愛するか、正しく神を愛するか、ということにあります。こうして自分の全部の力は、きれいに目的に向かって走ります。

ここでひとつ、私の大好きなドイツ文学のことわざを申しましょう。私はこの言葉を結婚式のあとでよく書いてあげるので、それはヴォ・グラウベ・ダ・リーベ *Wo Glaube, da Liebe*——信仰があれば諸君にも愛がついてくる。ヴォ・リーベ・ダ・フロイデ *Wo Liebe, da Freude*——愛が心を支配するならば、喜びもついてきます。ヴォ・フロイデ・ダ・ゴット *Wo Freude, da Gott*——喜びが心を支配するならば、神も喜んでその心の中に住みたもう。ヴォ・ゴット・カイン・ノート *Wo Gott keinen No*——神が心を支配したもうならば、困難に勝つこともでき得る。「ヴォ・グラウベ・ダ・リーベ・ヴォ・リーベ・ダ・フロイデ・ヴォ・フロイデ・ダ・ゴット・ヴォ・ゴット・カイン

ン・ノート Wo Glaube da Liebe, Wo liebe da Freude, Wo Freude da Gott, Wo Gott keinen Not]——ノート Not は困難ですね。世の中は困難でいっぱいでありますけれども、神といっしよにそれを忍びますと、まあなんとかなります。それは歴史、また日本の歴史においても、その中心点ではありませんか。

この細川ガラシャはオペラにもいたしましたし、たが、いずれ歌舞伎にもなるかもしれません。もしそうなら、どうぞ見てください。

最後に、一言で全部を申しますと皆様は若い人です。大きいエネルギーをもって日本の将来のために、正しく力強く働いてください。物質的な文化だけでは、どうも人間には足りないのです。精神的な文化、すなわち心の文化がその目的です。心の文化はいずれ永遠の花が咲きます。それは人類の存在のありさまであります。

こきげんよう。(拍手)

※当DVD収録の講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。